平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

島根大学医学部附属病院 原真司

米国での病院勤務の診療放射線技師はどのような業務を行っているのか，そして世界最先端の研究が行われている現場で，診療放射線技師がどのような役割を担っているかを知りたいと思い，この研修に参加した．

病院での業務はかなり細分化されていると聞いていたのだが，MRI 検査に限れば日本の技師とほぼ同等の業務を行っていると感じた．①頭頚部 MRA の処理は 3D ラボではなく装置本体のコンソールで行う．②病院でも研究用シーケンスが用いられる．③緊急検査の場合には呼び出される．④関連病院間でローテーションを行っていることは意外であった．日本との決定的な違いは MRI 検査 1 件あたりの時間である．スタンフォード大学では検査前に時間をかけて問診を行っていた．患者とコミュニケーションをとり検査への理解と協力を得られることは，結果的に高い品質の画像が得られることと，安全に検査を行うことに繋がると感じさせられた．

Lucas Center で研究に携わる技師は運用や安全について任されていることが多く，高度な知識と技術が要求されていた．ここでは研究に専念できる環境が整っており，「研究を楽しんでいる」と語られた Sandra さんが印象的だった．

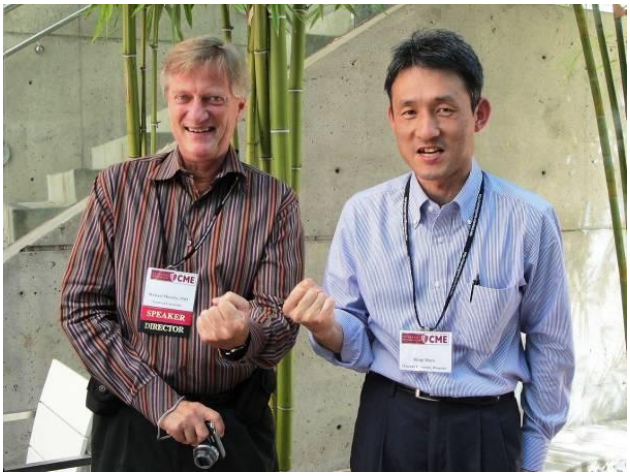
世界的に著名な先生方による理路整然として説得力のあるプレゼンテーションには圧倒された．どの先生方も将来に明確な目標を置き，幅広い視野で研究されていると感じられた．今回の研修で，分子イメージングについて基礎から将来展望まで知ることができたことは大きな収穫であった．

Outpatient Center では最新鋭の設備と，医療機関を感じさせない環境には驚かされた．①患者満足度の向上が画像診断をビジネスとして成功させている．②患者だけではなく職員同士もお互いを尊重し業務を行っていることには感心させられた．

楽しみにしていた 7T-MRI 装置は，ボランティアとしてマグネットに入る体験のみで自分で操作することはできず，超高磁場における問題点などを体感することができなかったのは残念だった．しかし昨年と比べコイルが改良されているとのことで，得られたボランティアの画像は，すぐ臨床にも用いられそうと思われるほどに完成度が高く，技術が着実に進歩していることが感じられた．

全国から集まった日々研鑽を続けている研究熱心な方々との情報交換も，この研修でしか得られない貴重な成果と考える．自己紹介を兼ねた研究発表は，私の放射線技師としての視野を大きく広げることができた．多くの刺激を受けたこの研修の成果を自分のスキルアップだけではなく，どうしたら技師全体のスキルアップに繋がるかを心がけ日々の業務に臨みたい．

最後にこのような研修を開催していただいたスタンフォード大学ならびに GE ヘルスケア，そして日本放射線技術学会の関係者の皆様に心から感謝いたします．



Moseley 先生との記念撮影．先生の手にはお気に入りのデジカメが．